

2024 年 7 月 1 日

## 東南アジア島しょ部などで使われている 8 言語の比較

### 1. 概要

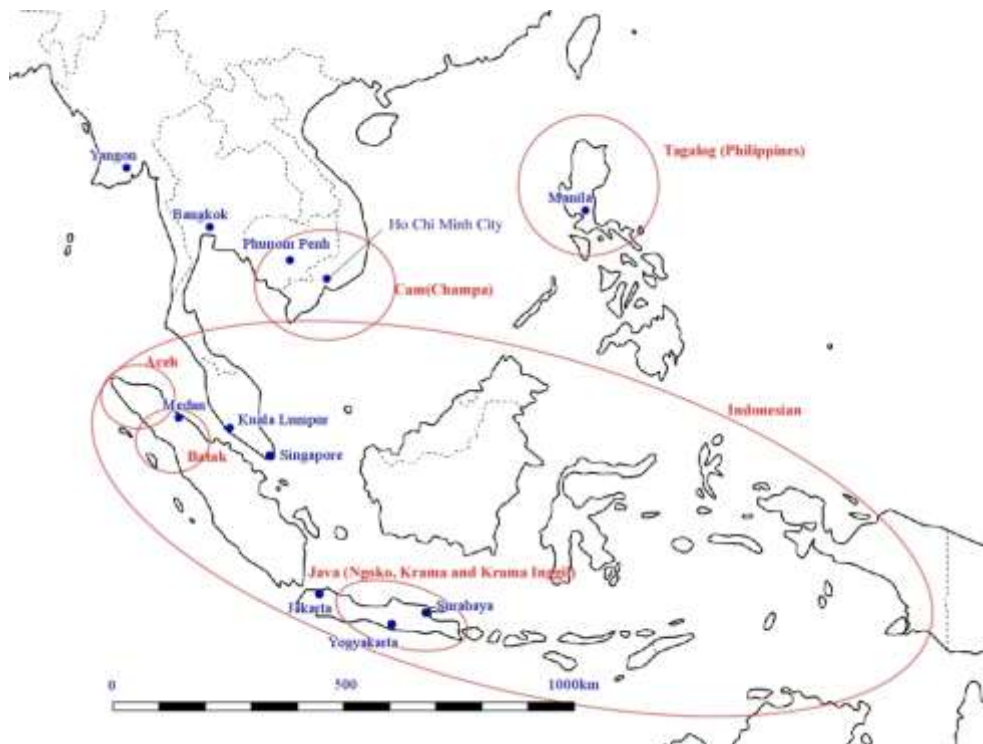
このウェブサイト以前から掲載していた東南アジア島しょ部で使われている主要言語を今回入手した北スマトラ州で使われているバタック語を加えて比較してみた。

このデータを用いてインドネシア語とインドネシアの諸地方語、ベトナムとカンボジアで使われているチャム(Cam)語、フィリピンで使われているタガログ(Tagalog)語の比較を試みた。インドネシアの諸地方語にはアチェ(Aceh)とバタック(Batak)、ジャワ語のゴコ(Ngoko)、クロモ(Krama)<sup>1</sup>、クロモインギル(Krama Inggil)の 8 言語の相関関係を調べてみた結果を以下に示す。

この調査には比較言語学で使われる基本語彙 200 を用いた。

またマレー語はほとんどインドネシア語と同一であるため比較の対象から外した。

これらの言語が使われている地域を下図に示す。



<sup>1</sup> ジャワ語の A は「あ」ではなく「お」に近い発音である。

## 2. 八言語の比較

### 2.1 概要

八言語の類似性グラフの一覧を下に示す。青い線で囲まれる面積が多いほど類似性が高く、少ないほど類似性が低い。



共通している単語の実数とその割合を表 1.1 と表 1.2 に示す。

| Languages  | Aceh | Batak | Cam | Tagalog | Ngoko | Krama | Krama Inggil |
|------------|------|-------|-----|---------|-------|-------|--------------|
| Indonesian | 90   | 52    | 55  | 47      | 75    | 69    | 48           |
| Aceh       |      | 37    | 63  | 32      | 41    | 32    | 20           |
| Batak      |      |       | 32  | 24      | 33    | 21    | 16           |
| Cam        |      |       |     | 36      | 33    | 24    | 15           |
| Tagalog    |      |       |     |         | 32    | 21    | 15           |
| Ngoko      |      |       |     |         |       | 123   | 85           |
| Krama      |      |       |     |         |       |       | 136          |

表 1.1 共通している単語の実数

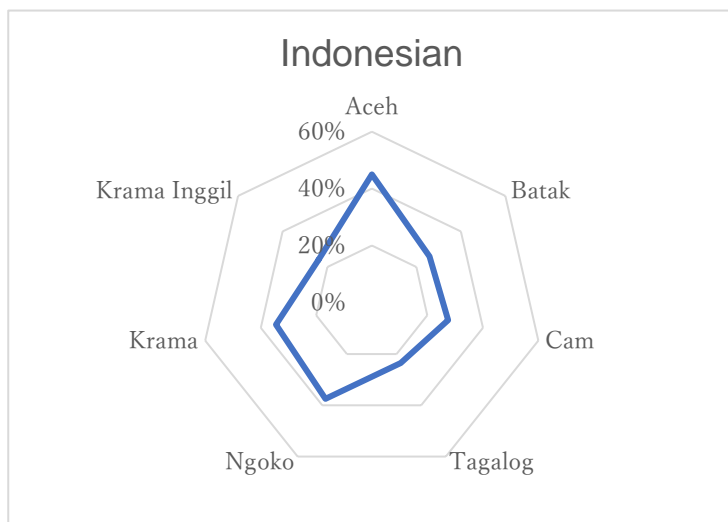
| Languages  | Aceh | Batak | Cam | Tagalog | Ngoko | Krama | Krama Inggil |
|------------|------|-------|-----|---------|-------|-------|--------------|
| Indonesian | 45%  | 26%   | 28% | 24%     | 38%   | 35%   | 24%          |
| Aceh       |      | 19%   | 32% | 16%     | 21%   | 16%   | 10%          |
| Batak      |      |       | 16% | 12%     | 17%   | 11%   | 8%           |
| Cam        |      |       |     | 18%     | 17%   | 12%   | 8%           |
| Tagalog    |      |       |     |         | 16%   | 11%   | 8%           |
| Ngoko      |      |       |     |         |       | 62%   | 43%          |
| Krama      |      |       |     |         |       |       | 68%          |

表 1.2 共通している単語の割合

これから、バタック語はインドネシアの地方語の中では、タガログ語と同程度に、マラヨ・ポリネシア語族派の他言語と類似性が低いことが言える。

## 2.2 各言語から見た類似性

(1) インドネシア語から見ると以下のグラフに示す通り、アチェ語が最も近く 45%が共通していて、次いで



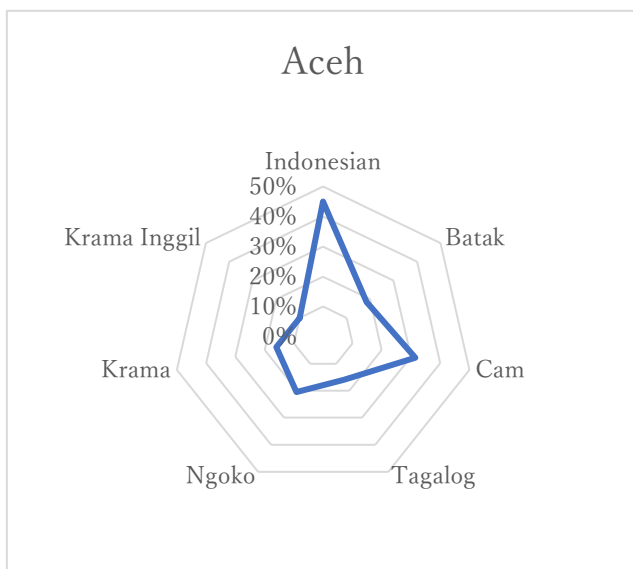
ジャワ語の一つであるゴコ(38%)、クロモ(35%)と続いている。これはインドネシア語が古代から通商用語として使用されてきたことと、アチェ語も中世から交易用語として使用されてきたことによるものだろう。

インドネシア語・マレー語に似ているインドネシアの地方語に西スマトラ州と

スマトラ島の東海岸で使われているミナン語がある。ミナン人は通商民族であり、マレー半島からインドネシア全域に拡散して主に商業に従事している。

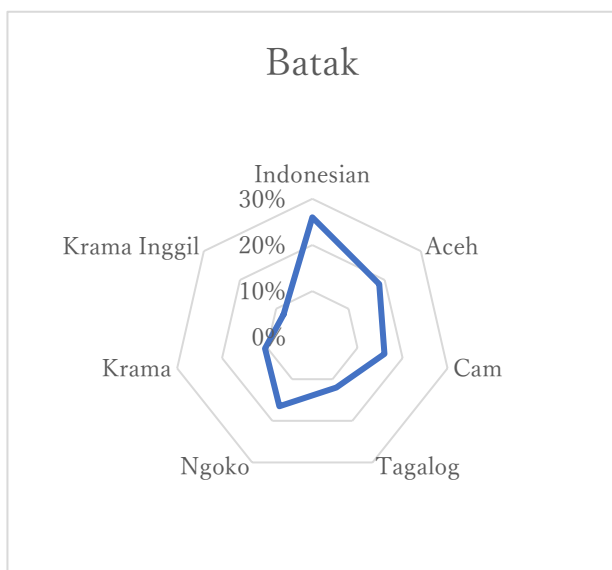
ジャワ語には一般的に使われている上品でない目下のものに使うゴコと比較的上品なクロモ、更には大変丁寧な言い方であるクロモ・インギルの三種類が現在では主に利用されている。このうちのゴコとクロモはインドネシア語に似ているが、クロモ・インギルはバタック語やチャム語、タガログ語と同程度以上インドネシア語から離れていることが分かる。

(2) アチェ語から見ると以下のグラフに示す通り、インドネシア語が最も近く 45%が共通していて、次いで



チャム語(32%)、ゴコ(21%)、アチェの南に隣接するバタック語(19%)と続く。チャム語の地域はこれらインドネシアの諸語が話されている地域のうちアチェが最も地理的に近いことと、チャム人とアチェ人は海洋交易民族であったため歴史的に接点が多かったためだろう。またクロモとクロモ・インギルとはタガログ語と同様な頻度で類似が見られるだけで文化的・言語学的にはそれほど影響を及ぼさなかったのだろう。

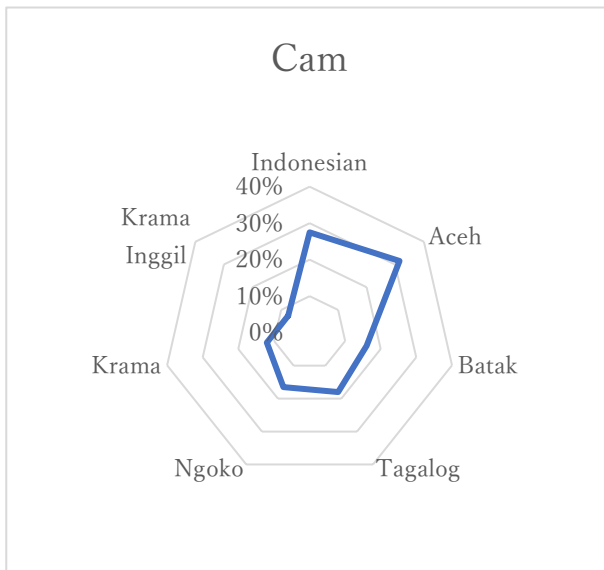
(3) バタック語から見ると以下のグラフに示す通り、インドネシア語が最も近く 26%が共通していて、ついで



でアチェ語(19%)、ゴコ(17%)、チャム語(16%)と続く。バタック民族は山岳地帯のトバ湖周辺がその本拠地であり、海岸から遠いため交易ルートから外れていたため、言語学的にはインドネシア語からかけ離れていて、類似の単語の発出頻度はチャム語と同程度である。

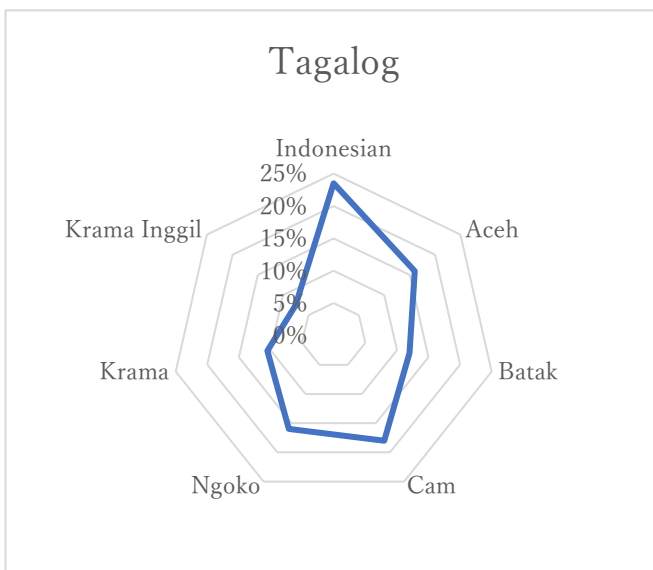
ちなみに、このデータは現代のバタック語であり、バタック語の古い表現は含めていないということであったから、昔のバタック語はインドネシア語からはもう少し遠い存在だったことが想起できる。

(4) チャム語から見ると以下のグラフに示す通り、アチェ語が最も近く32%、が共通している。次いでインド



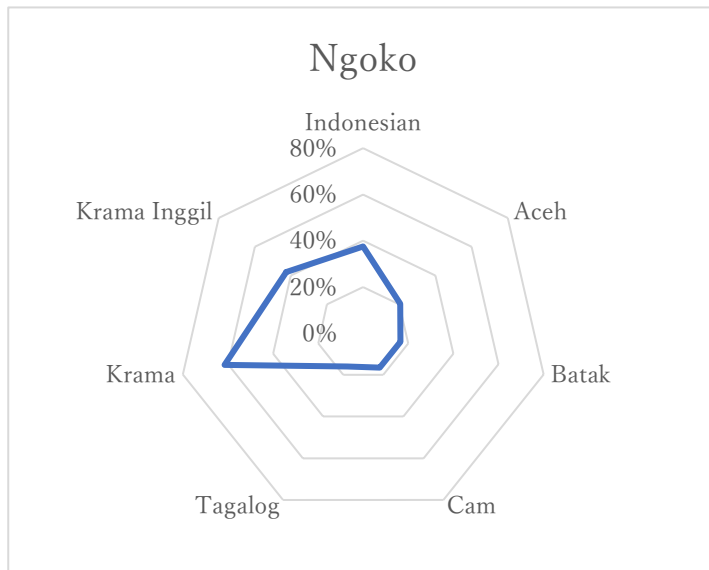
ネシア語(28%)、タガログ語(18%)となっている。バタック語とゴコはチャム語とはわずかに関係があるように見えるが、一方クロモとクロモインギルとはほぼ無関係のようである。チャム語の話者はカンボジアに多いが、現地のクメール語とは関係が薄いようである。

(5) タガログ語から見ると以下のグラフに示す通り、インドネシア語が最も近く 24%が共通している。次いで



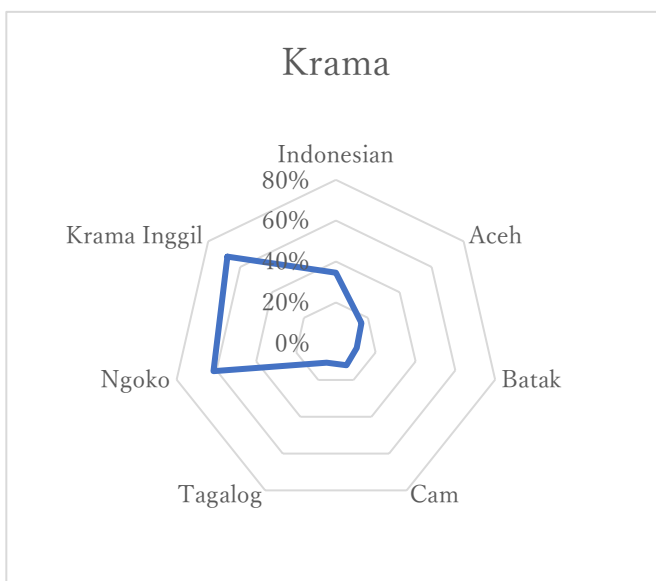
でチャム語(18%)、アチェ語(16%)、ゴコ(16%)となっている。チャム人は古代から南シナ海を縦横無尽に航海して交易を行ってきたことと地理的に近いのでチャム語の影響が強いのであろう。これらの言語の中で最も地理的に遠いアチェ語の影響も見える。一方クロモとクロモ・インギルとはほぼ無関係のようである。

(6) ジャワ語のゴコからみると以下のグラフに示す通り、クロモが最も近く 68%が共通している。これは当



然のことで、同地域で平行して使われているクロモとクロモ・インギル(43%)の影響が最も強いが、インドネシア語との関係も近い(38%)。

(7) ジャワ語のクロモから見ると以下のグラフに示す通り、クロモ・インギルが最も近く 68%が共通してい

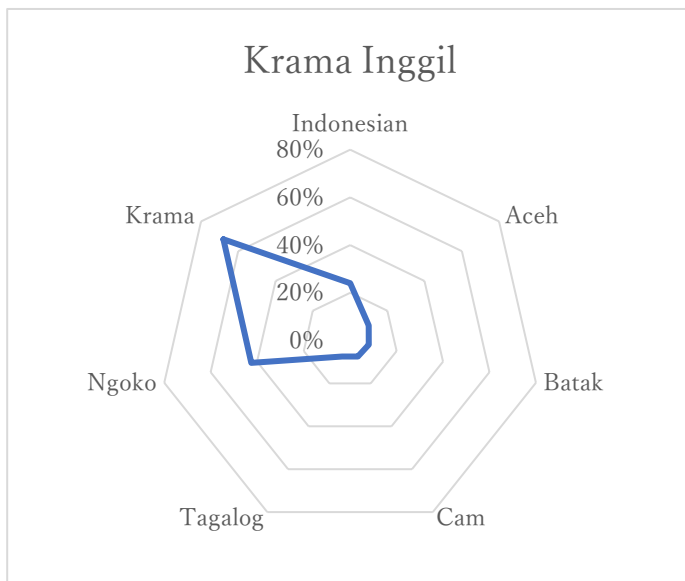


る。次いでゴコ(62%)とインドネシア語(35%)となっている。クロモとクロモインギルは東南アジア島しょ部で使われている言語の中では異種と言えるだろう。

ちなみに、インドネシア共和国が独立する際に国語をジャワ語にする話もあったが、ジャワ語は複雑なので現在のインドネシア語としたという経緯があった。上記のように統計的に見てもジャワ語は東南アジア島しょ部で

使われている言語とは別系統であるので、インドネシア語を国語としたのは正しい選択であった。

(8) ジャワ語のクロモ・インギルはジャワの宮廷用語から始まったとされていて、以下のグラフに示す通り、



クロモが最も近く、68%が共通している。次いでゴコ(43%)、インドネシア語(24%)となっている。クロモ・インギルはここで比較した他の諸言語とはほぼ無関係であることからして、インドから来訪した支配階級がジャワに持ち込んだ言語のように思われる。

ちなみに、このクロモ・インギルを歴史的

に関係がありそうな北インドの影響が強いネパール語とビルマ語、クメール語と比較してみたが、統計的には無関係であった。ということは、クロモ・インギルは南インドの言語に近いのかもしれない。

ジャワの王朝はヨグヤカルタ付近に多く都をおいた。そのためか、ヨグヤカルタとスラカルタでは女性の身長が他の地域のジャワ人に比べて高かったし、平均して肌の色が他の地域に比べて濃かったし、きれいな形の鼻の人も多いような気がした。

【考察】

上記のようにインドネシアが属しているオーストロネシア語族の内マレー・ポリネシア語派がフィリピンから



東南アジア南部まで広く分布しているのは、その中間にこの言語の祖先を使っていた人たちがいたのではないだろうか。

彼らは現在の南シナ海とジャワ海になっている土地であるスンダランドに住んでいたが、数千年前のフランドル海進などで浸水し始めた低地を追



われそれぞれ高地に逃れたため、同一母語から異なる言語が発生したものであろう。

東西南北に避難した人たちの中で災難に遭ったのはジャワ海を南に逃げた人たちだった。海面上昇という急激な地球規模の変化で、環太平洋火山帯に位置するジャワ島では火山噴火が盛んに起き、山麓の野生動物たちは北に向かって逃げ出した。そこで南下してきた人類と遭遇したため、多数の人類が野生動物の犠牲になったことだろう。このことは「[海を怖がるジャワ人](#)」に詳述してある。

歴史的に見ると、アジアでは米作の盛んであった地域は繁栄を極めていたが、ビルマ語話者の多いミャンマーでは中国雲南省からのたびたびの侵攻があり、カンボジアを中心とするメコンデルタも各民族の戦場となり何度も攻防の場所になったが、インドネシアのジャワ島は地理的に他部族の侵入がほぼなかったため、古代から中世にかけては強大な王国が起こった。有名なものにマジャパヒト王国がある。

ちなみに、カンボジアのクメール王国を立ち上げたジャヤヴァルマン王はその幼少時にジャワに人質としてとられていて、802 年頃にシャイレンドラ朝から現在のカンボジアを解放したと言われている。

このように、ジャワ海と南シナ海を通じた交易路が古代から存在していて、この地域間の交流は古代から盛んであった。

9 世紀の末には中国僧の義浄がインドに仏典を求めていく途中で、室利仏逝という国に数年間滞在して仏教とサンスクリット語を習得したと自著の「南海寄帰内法伝」に記している。1896 年に高楠順次郎が同本を英訳して A Record of the Buddhist Religion as Practiced in India and Malay Archipelago で発表するまで、この室利仏逝とはどこに位置するかが不明であったが、フランスの歴史研究家ジョルジュ・セデスがスマトラ島のパレンバンにこのシュリヴィジャヤ王国が位置すると 1918 年に論文 Le Royaume de Crivijaya の中で比定した。シュリヴィジャヤ王国史は[こちら](#)に。

しかしながら、当時の中国とインドとの間にあった海のシルクロードからはパレンバンは相当に離れており、当時の航路や物流の関係から見ると、義浄が数年間滞在したのはパレンバンではなくマレー半島東岸に位置するタイのスラタニー付近ではなかったろうか、と鈴木駿氏は自著の「[シュリヴィジャヤの謎](#)」で述べている。(終)